

黒毛和種牛一貫経営農場における事故低減への取り組み

阪神基幹家畜診療所

○鎌田立 笹倉春美 濱崎健太 泉弘樹 上田茂樹 井上雅介 嵐泰弘

農場の経営安定および事故低減のためには、畜主と獣医師のコミュニケーションが重要である。今回、子牛の肺炎および中耳炎が多発していた全農黒毛和種牛一貫経営農場において、診療所、農場スタッフおよび全農クリニックセンターと、出生子牛の飼養管理法について検討会を行い、管理法改善により2ヵ月齢までの肺炎および中耳炎発症は低減した。

材料および方法

2013年6月から2014年12月に出生した子牛82頭の飼養管理法を調査し、生後2ヵ月齢までの肺炎発症率、中耳炎発症率、その後の発症牛の死亡率を調査した。また、それぞれの発症日齢についても調査した。検討会は2013年10月、12月および2014年10月、12月に行った。管理法の違いから調査期間を以下の3期間に区分した。

期間① 2013年6月～12月に出生した子牛30頭を対象とした。午前9時から午後4時まで母子同居させ、夜間は母子分離した。全頭、午前中に追加哺乳を行った。1ヵ月齢および2ヵ月齢でキャトルバクト3を接種した。

期間② 2014年1月～9月に出生した子牛36頭を対象とした。飼養管理は期間①に準じた。キャトルバクト3の接種を中止した。

期間③ 2014年10月～12月に出生した子牛16頭を対象とした。母子完全同居を実施した。また、出生後1週齢までの体重増加量が5kg未満だった個体に追加哺乳を行った。期間②に準じ、キャトルバクト3の接種は実施しなかった。

結果

中耳炎発症子牛は全頭肺炎を併発しており、死亡個体はいずれも中耳炎発症牛であった。

期間① 肺炎発症率56.7%(17頭/30頭)、中耳炎発症率29.4%(5/17)、うち死亡率60.0%(3/5)、平均肺炎発症日齢30.6日、中耳炎発症日齢46.0日であった。肺炎発症子牛の76.5%(13/17)はワクチン接種後3日以内に発症した。

期間② 肺炎発症率44.4%(16/36)、中耳炎発症率56.3%(9/16)、うち死亡率33.3%(3/9)、平均肺炎発症日齢39.5日、中耳炎発症日齢49.0日であった。

期間③ 肺炎発症率37.5%(6/16)、中耳炎発症率16.7%(1/6)、うち死亡率0%(0/1)、平均肺炎発症日齢49.8日、中耳炎発症日齢56日であった。

まとめ

診療所、農場スタッフおよび全農クリニックセンターが繰り返し検討会を実施し、より適切と思われる飼養管理に変更することで、2ヵ月齢までの子牛の肺炎および中耳炎の発症率、死亡率が低減した。各農場に適した飼養管理法を検討するため、畜主と獣医師が綿密にコミュニケーションをとることが重要である。